

『市花「リンドウ」と里山』

かわにし山野草の会
会長 脇村 陞

万葉集に山上憶良（やまのうえ の おくら）が詠んだ2首の歌があります。

「秋の野に先たる花を 指折（およびをり）
かき数ふれば七種の花」
「萩の花 尾花 葛花 撫子が花
おみなへし また藤袴 朝貌が花」
日本の里山の代表的な秋草が詠まれたことに始まる「秋の七草」です。



万葉集が8世紀頃編まれたとすれば、実に1300年間里山の風景は昭和30～40年代まで変わらなかったこととなります。ハギ、ススキ、クズはどちらかというところ蕪になっても丈が高い為、日照不足で枯れることはありませんが、ナデシコやオミナエシ、フジバカマ、キキョウなどは川西市では現在消息不明です。これら下草植物は草刈が行われる事で里地里山の風景が維持される。

会員が育てる山野草もタカネナデシコ、ハクサンオミナエシ、キクバフジバカマ、アポイキキョウ、キリシマリンドウ、アサマリンドウなど同じ種類の植物も育てています。特殊な環境の山野草を除き殆どの山野草も里山にあるんです！！。

今日本は1300年間守られてきた里山を「里地を蕪に里山は極相林(注)に」成るのを手をこまねいて待っています。

市の花「リンドウ」も川西市ではわずかながら残っています。

川西市緑化協会が積極的に育成普及と自生地保護に当たられるとの事。かわにし山野草の会も出来る事が有れば協力したいと思っています。そして少しでも早く里山保全が出来、里山に山野草が再び再生する事を願っています。

追記

リンドウの植生調査時に地主さんからよく言われるのは、「こんなもんじゃない、本当はもっと沢山あった！。自分さえ良ければいいと考える人が団体で来て皆抜いて行きよる！」と！！。行きがけの駄賃のつもりで抜いて行かれると、安易な気持ちになり栽培成績が上がらず枯らすことが多い。

私が推奨することは野生のリンドウは花後沢山の種を着けますので実生をしてほしい事です。実生をすることで貴方のお庭に少しはなじんだリンドウが育つのではないのでしょうか。



(注) 極相林：植物群落の遷移の最終段階で絶えず変化を伴いながら全体として安定した状態が続く林